

## ウガンダ・カンパラの新興「ミュージカル」-- デジタル技術を操る若者たち (特集 途上国のエンターテインメント事情)

著者	大門 碧
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	203
ページ	18-19
発行年	2012-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00003902">http://hdl.handle.net/2344/00003902</a>

# ウガンダ・カンパラの新興「ミュージカル」

## ーデジタル技術を操る若者たちー

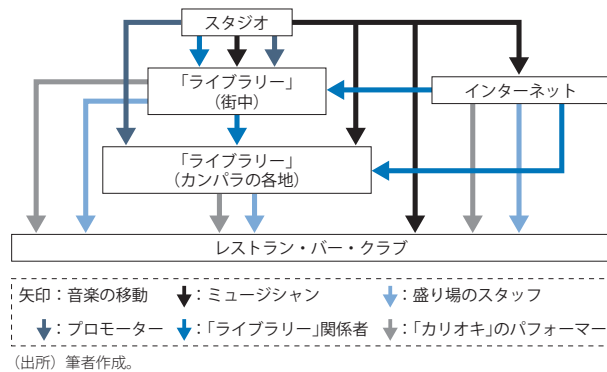
大門 碧

東アフリカのウガンダ、首都カンパラ。夜は、そこかしこのレストランから音楽が鳴り響く。ステージでは派手な色のTシャツやスーツ、ドレスなどを着こなし、若い男女がマイクを片手に歌ったり、ダンスをしたりしている。音楽はアメリカのヒップホップやR&B、カンパラの共通語となっているガンダ語で歌われるポツポツ。いや、よく見るとステージ上の若者は歌ってはいない、「クチパク」である。次には、大きなおなかをした男性とミニスカートの女性が仲良く腕を組んで登場。すると直後に、民族衣装に身を包んだ別の女性がやってきて二人にどなり始める。ただし言葉はすべてスピーカーから流れてくる音楽のなか。かれらは歌を「クチパク」しながら、芝居をしているのだ。いわばカンパラ版ミュージカルだ。

### ● ショー誕生の背景

このショーが勃興した背景には、ウガンダにおける一九九〇年代の経済復興と政治の安定がある。真夜中まで歩き回ることができる環境や、盛り場に集まる人びとの経済的な余裕が、この若者たちのショーを盛り立てた。また、音楽のデジタル技術の発展も見逃せない。一九九〇年代初めにCDが複製できるコンピュータが入ってくる、徐々に海賊版のCDの販路が拡大してゆき、二〇〇〇年代半ばには、レコード会社によるCDやテープの製作・販売は衰退した。現在のカンパラでは、音楽は「ライブラリー」と呼ばれる場所を経由して流通する(図1)。そこは、スタジオやインターネットから集めた音楽をコンピュータに保管し、それを、盛り場のスタッフやパフォーマー、そして一般の人びとへ、CDなどに焼いて提供している。こうしてレストランやバー

図1：カンパラにおける盛り場への音楽運搬経路



のコンピュータには、「ライブラリー」へ通う盛り場のスタッフやパフォーマーの手を介して、また宣伝目的のミュージシャンによって、新旧ジャンルを問わずたくさんの曲が集まってくる。この結果、



多様な音楽を使ったショーがたやすく実現可能となるのである。このショーは「カリオキ」と呼ばれる。原語となる「カラオケ」の機械がカンパラに初めてやってきたのは、一九九六年。「カラオケ・ナイト」という催しが実施され、そこで若者たちはアメリカ音楽を歌うだけでなく、踊ることを優先し、マイクを持ちながらも実際には歌わない「クチパク」の演目を生み出した。さらにかれらはグループを結成し、カラオケの機械がないほかの盛り場へと活動場所を広げていった。その際、長時間のショーを開催するために、踊らない「クチパク」の演目も取り入れた。ただし、こうしたパフォーマンスの中心にいたのは大学生の若者たちで、かれらは西欧の音楽にしか興味がなかった。しかし二〇〇三年に、資金繰りに困ったあるNGOの下部組織が盛り場でショーを行うようになると、さら

に変化が訪れた。この組織は、もともと地元音楽を使って学校やコミュニティで啓蒙的な内容の芝居を見せていたので、盛り場での公演にもその音楽を取り入れたのである。そして、「コメデイ」と呼ばれる芝居をする演目もこの組織の参入をきっかけに創出されていった。

### ●音楽を組み合わせてつくる物語

二〇一一年に実際に「カリオキ」で行われた「コメデイ」を紹介しよう。(1)『このままの僕を好きでいて「唄…ミサーチ・セマクラ」』夫婦が登場し、夫が妻に「自分はお金をもっていないけど、このままの自分を愛してくれ」と語る。(2)『怖れないで「唄…ジュリアナ・カニヨモジ」』妻が夫に「たとえ貧乏でも怖れない、そのままのあなたが好き」と応じる。(3)『すべての人はみな自分の家を持つべき「唄…フレッド・セバレ他」』地主が登場し、夫婦に対して「家賃を払え」と、激しく非難する。(4)『かれらは私たちを差別する「唄…デビッド・ルタロ」』夫が「人びとは貧乏人を差別する」とつちやく。この四曲すべてが地元で日常的に話されているガンダ語で歌われるが、特に(3)と(4)のような「カドンゴ・カム」というジャンルの音楽が「コメデイ」では多用される。

この音楽は、ヨーロッパだけでなく隣国のコンゴ、ケニアなど様々な地域から人びとがカンパラに流入してきた一九五〇年前後に生まれ、カンパラにもともと王国を築いていたガンダ民族文化の復活をめざしつつ、外国文化と混成した新しい都市文化として成立した(参考文献①)。歌詞には庶民の視点から世界が描かれており、「コメデイ」によって「カリオキ」は、アメリカ好きの若者たちだけでなく、ガンダ人を中心とする大衆全体を楽しませるものとなっている。

### ●バック・ステージの混乱

「カリオキ」の舞台裏をのぞいてみる。「コメデイ」はショー全体の中心、客が多い時間帯をねらって行われる。「コメデイ」のパフォーマーたちは、たいてい公演が始まってから歌を並べ出し、「君は、こいつの妻の役で、この曲をこいつに向かって歌って、したら僕が出て行ってこの歌を歌う」といった程度の打ち合わせをする。パフォーマーたちは歌詞の内容がわかっている、曲名を聞けばどんな演技をすればいいのか、すぐにのみこめるようだ。衣装は自分で用意するのが基本だが、その場で衣装や小道具の貸し借りがよく起こる。女装をする男

性は、女性からドレスや化粧道具、髪まで借りるし、ステージに乗る寸前に「借りて当然」という態度で他人の鞆を小道具として持っていく。貸すほうが抵抗する姿は見かけない。

しかし、せっかく衣装や小道具の準備が万端でも、使いたい曲が公演場所のコンピュータのなかにないことがある。「ライブラリー」でつくったCDを公演場所のコンピュータが読み取れないこともある。「コメデイ」は人気があるから簡単に中止するわけにもいかない。そうなるパフォーマーたちは、コンピュータとバック・ステージの間を行き来しながら、「あの歌はあるか?」「じゃあ、これは?」と騒いで、どうにか「コメデイ」をひねり出す。二〇一一年七月のある晩にはコンピュータの調子がおかしくて、思いつく曲がごとごとくなかった。諦めて衣装を脱ぎうとしたものもいたが、結局、なんとかこなしてしまった。そのときかれらは「なんでもいいから男と女の(デュエット)曲を流してくれ」とコンピュータを扱うスタッフに伝え、何の曲を使うか知らないままに舞台に上がり、その場でまさしく即興でパフォーマンしていたという。「知らない曲が流れても自分はコメデイができる」「ゆっくりゆっくり歌詞を聞

いて曲の内容を理解しながら演じるんだ」と教えてくれた。パフォーマーたちのもつ柔軟性に圧倒される。

### ●外からのテクノロジー流入と若者たちのパワー

パフォーマーたちは、衣装や小道具、そして音楽でさえも即興で使いこなす。持ち前の柔軟性と音楽への知識で、ダンスやただの「クチパク」より難しそうな「コメデイ」を実現させる。「カリオキ」が勃興した背景として、順調な経済発展や世界から入ってきた音楽とデジタル技術は見逃せない。けれども、パフォーマーである若者たちのパワーがあつてこそ技術の革新は輝くのである。

(だいもん みどり/京都大学アフリカ地域研究資料センター)

#### 《参考文献》

- ①Nannyonga-Tamusuza, S. 2002. 'Gender, ethnicity and politics in kadongo-kamu music of Uganda: Analyzing the song "Kayanda"'. In M. Palmberg & A. Kirkegaard (eds.) *Playing with Identities in Contemporary Music in Africa*. Uppsala: Nordiska Afrika Institute, pp. 134-148.